

月刊「キリスト教書評誌」

本のひろば

July 7
2022

ISSN 0286-7001

一般財団法人キリスト教文書センター

1957年7月17日第三種郵便物認可

2022年7月1日発行(毎月一回1日発行) 第775号

● 出会う・本・人

本を介した著者との対話・人との交わり 高崎 恵

● 特集 ヘルマン・ヘッセの魂に触れるなら

この三冊! 板倉素子

● 本・批評と紹介

田中 光著

新しいダビデと新しいモーセの待望 鎌野直人

星野宏美著 メンデルスゾーンの宗教音楽 樋口隆一

竹本修三、木村護郎クリストフ著/日本クリスチャンアカデミー編

脱原発の必然性とエネルギー転換の可能性 久保文彦

トーマス・レーマー著/白田浩一訳

ヤバイ神 左近 豊

小川 修著/小川修パウロ書簡講義録刊行会編

小川修。パウロ書簡講義録 8 石川 立

ケリー・M・カビック著/藤野雄大訳

シンガクすること、生きること 小室尚子

川上直哉訳著

P・T・フォーサイス 活けるキリスト 大頭真一

山口雅弘著 ガリラヤに生きたイエス 清水和恵

近刊情報

書店案内

フランソワ・トレテイーニの神論

青木義紀著 その神学的内容とスコラ的方法論

【大森講座36】

17世紀のプロテスタント正統主義・スコラ主義は思弁的で無味乾燥と評されるが果たしてそうか。代表的な神学者であるトレテイーニの神論を手掛かりに、宗教改革の偉大な発見を後代に継承する重要な結節点として、その神学の再評価を試みる意欲作。

6月20日

◆四六判・定価1430円

レヴィナスの時間論

大反響

内田樹著 『時間と他者』を読む



レヴィナス思想の戦後の出発点を告げる『時間と他者』。難解をもって鳴る同書を徹底的に精読・注解することを通して、深い苦しみの時間を生き抜いたユダヤ人の希望の時間論が浮かび上がってくる。著者の「レヴィナス三部作」ついに完結。

◆四六判・定価2860円

詩人は聖書をどのように表現したか

柴崎聰著 日本の近現代詩人16名を読む！

4月25日

信仰者かつ優れた実作者である著者のみがなしうる透徹した読み。取り上げるのは島崎藤村／三木露風／山村暮鳥／八木重吉／石原吉郎／安西均／島朝夫／高野喜久雄／片瀬博子／塔和子澤村光博／高橋喜久晴／野村英夫／島崎光正／阪田寛夫／森田進。

◆四六判・定価2210円

ヤバイ神

不都合な記事による旧約聖書入門

トーマス・レーマー著／白田浩一訳 待望の書！

3月25日



旧約聖書の神はなぜ横暴で残酷に見えるのか。そんな記述をどう解釈すべきか。多くの人が躓くテキストを旧約学の第一人者が取り上げ、それらの表現の意味と理由を考察し、愛と解放の真の神の「人柄」に迫った、目からウロコの書。

◆四六判・定価2420円

古代末期・東方キリスト教論集

戸田聡著

5月25日

◆A5判・定価5775円

キリスト教修道制の成立をめぐる諸研究、『エジプト人マカリオス伝』や最初のシリア語キリスト教著作家バルダイサンに関する研究と原典翻訳、そのほか著者が企図するヴェーパー『宗教社会学論集』全訳をめぐる諸論考など、常に優れた成果を生み出してきた研究者の歩みを示す27編。

注目の新刊



本を介した著者との対話・人との交わり

高崎 恵

博士論文作成に本腰を入れはじめた頃、マーク・R・マリ
ズ (Mark R. Mullins) 先生 (当時上智大学) のご著書 *Christianity
Made in Japan* 単訳のお話を、ご紹介いただいた。日本のキリス
ト教土着運動に関する本格的な研究書で、不安はあったが、翻
訳出版企画者の奥山倫明先生 (南山大学)、ご紹介者で博論指
導教授の宮永國子先生 (当時国際基督教大学) の励ましを受け
てお引き受けすることにした。

草稿をまとめ、専門用語やキリスト教事情に関する奥山先生
のご指導もいただいて、宗教関連出版の経験豊富な気鋭編集者
中嶋廣氏が新たな出版・流通を目指して工藤秀之氏と創業した
出版社トランスビューに入稿した。しかしその時、スタッフ2
名の同社に今もロングセラーを続けるヒット作が生まれ、対応
に追われて編集作業はストップ。ゲラ作成まで長期待機を余儀
なくされた。しかし無駄かに思えたその期間は天の配剤だった。

待機中放っておいた訳文を、編集再開後他人の目で読み直す

ことができたからだ。そこで沸きあがったのは、著者の意図を
この翻訳は伝えているのかという疑問と不安だった。英文和訳
として間違いではないのだが、でも何か違う。見直し確認用
だったはずの初校ゲラ用の原稿は、著者の真意と教えを求め
過去の私の果てしない問いかけへと変貌した。

著者と向き合い、周囲の人々をまきこんで交わす対話。博論
執筆にとりかかる頃に体験するのでは遅きに失したとしか言い
ようがないが、これこそが、研究者としての私の本との真の出
会いなのかもしれないと、ひとり興奮しながら、中嶋氏と校正
の三森睦子氏の鋭い問いかけに助けられつつ校正を重ねた。邦
訳『メイド・イン・ジャパンのキリスト教』は、「横書きを縦
書きに変えた翻訳書」は書評しないと噂に聞こえた批評家が、
書評をお引き受けくださった。出会いを求めた私の悪戦苦闘の
ささやかな成果だったのかもしれない。

(たかさき・めぐみ 国際基督教大学アジア文化研究所研究員)



ヘルマン・ヘッセの魂に触れるなら

▼ハッセル三冊！

板倉素子

(いたくら・もとこ) 千葉経済大学短期大学部名誉教授 比較文学／異文化
コミュニケーション

ヘルマン・ヘッセ(一八七七)

一九六二) と言えば『車輪の下』を思い浮かべる向きもあろうが、弱冠二九歳の所謂青春小説である。(知♠愛) (生♠死) (聖♠俗) など二極の対立をテーマとした作風が大きく転換し、矢車のように中心から何本もの対立軸が伸びるようになり、更にそれが複雑に絡み合い、中心が移動し浮遊し始め、対立軸さえ曲線を描くまでになるのは、熟年を迎えた四十代以降のヘッセだと思う。ここではそうした深まりと拡がりを増す彼の精神世界を見ていきたい。

戦平和の論調が批判を浴び、世間の反感を買ったことを理由に上げることができよう。しかし何よりも、ヘッセ自身の思索が行き詰まったのだと思う。

第二部のシッダールタは一転して世俗にまみれる。川を渡った対岸で娼婦と交わり、大商人の庇護の下で財を築き、かつて蔑んでいた小市民的享楽を舐め尽くすが満足できる訳もなく、惨めに打ちひしがれ再び川に戻ってくる。

この作品には「渡し守」なる謎の人物が登場する。名をヴァズデーヴァと云う。言数少なくシッダールタに川に聴き川に学べと諭し、仏陀を超える師となるが、弟子の顔に流れに傾聴し身を委ねる悟りの境地を見て取ると、「光を放ちながら」静かに森の奥へと姿を消す。筆者は渡し守に、*Quo Vadis?* (主よ何処へ?) と問うペトロを残して歩み去るキリストの背を見る想いがするのである。渡し守を継いだシッダー

を求める巡礼であった。やがてゴータマと呼ばれる仏陀(覚醒者)と出逢うと、「あれを見よ! あの人こそ仏陀だ」と声をあげて、イエスを指すピラトを彷彿とさせるが、暫くすると「何びとも解脱は教えによつては得られない! ……一人自分の目標に到達するため遍歴を続ける」と告げ、帰依したゴータマを残して仏陀のもとを去って行く。

途上彼は、私は自分について何も知らない。自我を細かく切り刻み、殻を崩壊させたいが、そのため自分自身は失われてしまった」と嘆く。こうして第一部は終わるのである。

いざ筆を執ると一気呵成に仕上げることの多いヘッセには珍しく、第二部を書き始めるまでにおよそ一年半の空白がある。精神を思ふ最初の妻マリアとの別居、息子達を余所に預けてのスイス移住、第一次世界大戦中に捕虜保護機関で慰問新聞の編集に携わり、反

「私の信仰告白」と自ら記す『シッダールタ』(一九二二)は、仏陀の幼名ゴータマ・シッダールタに由来する。それ

故釈迦の伝記と誤解されたりもするが、釈迦は別の人物ゴータマとして後段に登場するから、むしろヘッセの精神遍歴を最もよく語る作品と言える。

インドのカースト(身分制度)で最高位の僧侶階級バラモンの息子として生まれ、俊秀の誉れ高いシッダールタは、苦行僧の群れに無二の友ゴータヴィンダと共に加わり、自分探しの旅に出る。それは〈真我〉を、聖音(オーム)

ルタの顔には、老いたヴァズデーヴァ、そして老ヘッセとも共通の深い哲学の皺が刻まれていて、今尚多くの人生を乗せて川を渡っているように思えてならない。

シッダールタが覗き込む川面は、自分の顔を映すと同時に、ありとあらゆる顔が流れ寄り流れ去る。全てが友であり師であり、苦楽、善悪、生死、あらゆる悩みと笑いが纏れ合い結び付き、形を変えて過ぎて行った。シッダールタは一つの声から立ち上るのを聴く。全てを融合する唯一の言「オーム(完成)」だった。

ヘッセがノーベル文学賞(一九四六)を受賞する契機となった『ガラス玉演戯』(一九四三)は、最後の作品で長編の上に難解である。この演戯がいかなるものかは具体的に分かり難い。高度な法則で組み上げられた神秘の記号と

言で、文芸・音楽・美術の総合芸術を、全ての科学、特に天文学や高等数学を表すらしいのだが、魔術性を帯びて色とりどりの様々な大きささと形のガラス片が音楽を奏で図形を描く。万華鏡のようでも、色ガラスの玉で記されているオーケストラの指揮者のスコア(総譜)のようでもある。

この時機ヘッセは妻の精神病に翻弄され、自らも精神療養をしてフロイトの精神分析の影響を受けた。多くの天才が統合失調症傾向にあったとされるように、鋭敏繊細を極めたヘッセも、七色に輝き踊るガラス玉や全ての色の光が融合すると無色透明になる現象を目の当たりにしつつ、創作に耽っていた可能性も排除しきれない。

しかしこれ以上の詮索は無意味であろう。ヘッセは研究され学ばれることを嫌うからだ。求めれば対象は姿を隠す。あるがままに見て聞くがよい。ヘッ

セの精神世界はその魂に触れさえすれば充分なのである。

二五世紀頃のユートピア「カスターリエン」で最高位の「ガラス玉演戯名人」にまで上り詰めた主人公クネヒト（僕／奴隷）は、所詮演戯は作られたモノに過ぎず、その完璧さこそが自由な創造性を奪い時間の超越、永遠や解脱を阻む（はば）と思い知ると「カスターリエンの没落」の予感の中、友の息子ティトーに一介の教師・僕クネヒトとして仕えるべく、ユートピアから人間生活の現実と自然世界へ、ティトーの待つ高地の湖畔にある山荘へと向かう。しかしティトーに会った翌朝、湖に飛び込んでは対岸へと泳ぐ青年に誘われるように水に入ったクネヒトは、旅の疲れと水の冷たさに湖底に沈んで浮いて来ることはなかった。僕となり犠牲の死を遂げたクネヒトは、しかし十字架のキリストのように、命ある人生を新しい人

に生まれ変わらせる偉大なマイスター（師／名人）の役割を果たしたのだ。「彼の道は、円形を描いて進んだ。楕円形、あるいはラセン形、…直線系でないことだけは確かだった。直線は明らかに幾何学にだけあるもので、自然や生活にはなかった。」漂泊の魂にとって、人生はいつも回り道であり予測不能である。

ヘッセの住む所、赴く所には川と湖があった。水は命の源であると同時に命を奪いもした。雨は川となり海となつて天に昇り自然界を循環していた。水は常に流動的で融通無碍（むげ）に形を変えて器（うつわ）に収まり、清濁併せ呑んで全てを融合し下流へと運んで行った。風景は変わらなくても水は常に新しくなった。

『ヘルマン・ヘッセ エッセイ全集2』はヘッセ理解の助けとなる。とりわけ『魔術師』『略伝』『我がまま』『筏下り』

『仕事の夜』『私の信仰』『神学断想』をお薦めしたい。

ヘッセを語る際大切なのは、少年時代「一番なりたかったのは断然魔法使いだった。…物書きの仕事をするようになってから、自分の作品の背後に姿を消し、豊かな意味を持つ遊戯的な名前の背後に隠れ、それで自分を見えなくしようと、何度も試みたのである。」と云う魔術性・遊戯性そしてフモールの世界観ではなかるうか？ ドイツ文化のフモールは英語のユーモアを凌駕（りょうが）する深い哲学性を帯びていて、禪（ぜん）の〈空（くう）〉に匹敵（ひてき）し〈無の境地〉に近い。

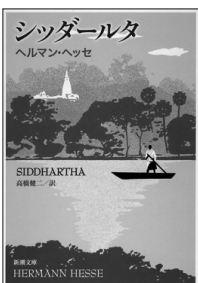
そしてもう一つの特色は〈我がまま〉への憧憬（しょうけい）であろう。「私が大いに気に入っている徳が、一つだけある。それは我がままという……我がままな人は、たった一つの無条件に神聖（かみ）な、自分自身の中の掟（おと）、「我がまま」なる〈心〉に従うのである」と、自己に正面から向

き合い、「本来の自己（真我）」の声に聴くことを説くのもヘッセである。

ヘッセを異端とか仏教改宗者と見るのは当たらない。母方の祖父と父はインドで伝道師だったから、書斎には密教的な神々の像が溢れていて、少年ヘッセが心惹かれたのは間違いないが、マ

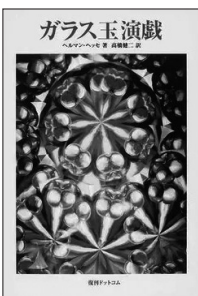
ルティン・ブーバーの「我、汝の実存主義神学」に傾倒し、スイス、モンタニョーラで八五歳の生涯を閉じ、ルガーノ湖畔の聖アボンデイオ教会墓地に眠るヘッセの信仰を、疑うべきではないと筆者は考える。

扱、初夏の朝まだき、一冊のヘッセを携えて近くの川を訪（たず）ね、朝日にきらめく水面（みなも）を眺（み）めながら清流（せいらい）に耳を傾け、己（おの）が内なる声（こゝろ）に耳をそばだててみるのはいかかであろうか？ ひよっとしたら〈沈黙（しんもく）の神〉が深い水底（みんぞこ）から〈何か〉を囁（ささや）いて下さるかもしれないから…。



『シッダールタ』

ヘルマン・ヘッセ：著
高橋健二：訳
新潮社
1971年刊
文庫判 164頁
572円



『ガラス玉演戯』

ヘルマン・ヘッセ：著
高橋健二：訳
復刊ドットコム
2004年刊
四六判・並製 528頁
3,080円

※ご紹介の本は現在入手が難しい可能性があり、図書館のご利用をお薦めいたします。
尚、電子書籍の出版もあります。



『ヘルマン・ヘッセ エッセイ全集2』

ヘルマン・ヘッセ：著
日本ヘルマン・ヘッセ友の会・研究会：編・訳
臨川書店
2009年刊
四六判・上製 341頁
3,740円

チャイルズズの解釈学的手法から メシア預言の使信を探る

〈評者〉 鎌野直人



新しいダビデと
新しいモーセの待望
イザヤ書の正典的解釈
田中 光著



英語圏で著名な聖書学のポッドキャスト「OnScript」において「最近五〇年の聖書学の著書で最も重要なものはないか」というアンケートが出演者に投げかけられると、多くの旧約聖書学者はB・S・チャイルズズの『聖典としての旧約聖書入門』（未翻訳、一九七九年）と答える。その一方で、チャイルズズの著作のなかで和訳されたのは『出エジプト記——批判的神学的注解』（一九九四年邦訳）と『教会はイザヤ書をいかに解釈してきたか——七十人訳から現代まで』（二〇一八年邦訳）にとどまり、チャイルズズが提案したカノンの解釈を適用してきた邦語による研究は数少ない。

今回、『教会はイザヤ書をいかに解釈してきたか』の翻訳者の一人で、東京神学大学常勤講師の田中氏が、二〇一八年に東京神学大学に提出した博士論文が出版されたこと

ンターテキストチャリティーのみならず、編集者たちの意図した通時的なインターテキストチャリティーをも踏まえて検討したことである。通時的か、共時的か、という二分的な解釈ではない、テキストの字義的意義の複層的な次元を踏まえたものを提示している。具体的には、一―二章の王に関する預言を通して「新しいダビデ」のビジョンの地上的及び終末的待望の両者を明らかにし、四〇―五五章の主のしもべに関するテキストから、新しい出エジプトをもたらず「新しいモーセ」のビジョンの歴史的及び終末論的次元を論証した上で、この二つのビジョンが最終形態においては相互補完的であり、包括的なメシア像を提示し、「律法と預言者」という神学的文法と共同体の礼拝という営みの文脈に足場を置いていることをインターテキストチャリ

は、日本の旧約聖書学研究において画期的なことである。その理由の一つは、チャイルズズの提案するカノンの解釈（従来「正典的解釈」と呼ばれている）の全体像が日本語でまとめられたことである。各書の形成から最終形態へのプロセス、後の世代の解釈のために置かれた「インターテキストチャリティー」、この枠組みを踏まえている聖書解釈の歴史など、誤解されがちなカノンの解釈の特徴を正確に説明している。さらに、信仰の基準とカノンとの間に存在するよりダイナミックな関わりを注意深く表現している。第一章は旧約聖書学緒論研究に不可欠なものとなると評者は確信する。

本書が画期的であるもう一つの理由は、複層的な特徴を持つカノンの解釈の中で、旧約聖書の「字義的意義（sensus literalis）」を、最終形態のテキストの共時的なイ
ティリーの検討から示している。

評者は、田中氏の研究に感謝の意を示すとともに、激励として、疑問点を挙げておきたい。まず、七章一四節と八章三節のつながりは簡単に否定できるのだろうか。次に、「新しいモーセ」という視座は主のしもべの理解を深めるものなのか、歪めてはいないか。最後に、「四つのしもべの歌」という歴史的批評的視座が、四〇―五五章の修辭学的特徴の理解を妨げてはいないか。今後の田中氏の研究に大いに期待している。

なお、ヘブライ語が二行以上にわたって引用されているとき、そのテキストの文頭が下の段から始まるように並べられている点に違和感を感じることを付記しておく。

（かまの・なおと＝関西聖書神学校校長
A5判・六〇〇頁・定価七三七〇円・教文館

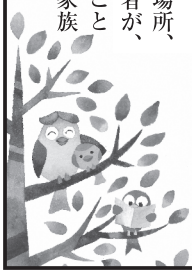
『季刊 教師の友』4年間の
連載を単行本化



白旗眞生 著

生きづらさやさまざまな事情をかかえた若者があつまる場所、「青少年の居場所 Kitos」キートン。その主宰者である著者が、キートンで出会う一人ひとりと深く関わるなかで感じたことを綴る。精神科医・石丸昌彦氏との対談「子どもたちの家族として」も収録。四六判並製・112頁・定価1430円

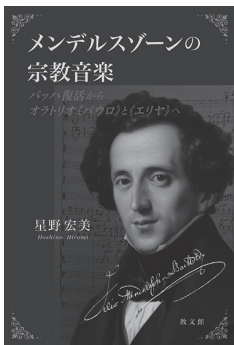
羽をやすめるとまわり木で 「青少年の居場所 Kitos」から



日本キリスト教団出版局
〒169-0051 東京都新宿区西早稲田2-3-18
☎03-3204-0422 ☎03-3204-0457
E-mail: eigyoku@bp.ucci.or.jp 《価格10%税込》
<https://bp-ucci.jp>

天才作曲家の 宗教観とその源泉

〔評者〕樋口隆一



メンデルスゾーンの
宗教音楽
バッハ復活からオラトリオ
《パウロ》と《エリヤ》へ
星野宏美著



いまでは西洋音楽史を代表する作曲家として知られているヨハン・セバスティアン・バッハ（一六八五—一七五〇）であるが、その死後は一般に忘れられ、一八二九年、当時まだ二〇歳の若者だったメンデルスゾーンによる《マタイ受難曲》BWV二四四の復活上演を契機として蘇ったことはそれほど知られていない。当時は作曲家と演奏家が基本的に同一だったので、作曲家本人が世を去るとその作品も演奏の機会を失うことが多かった。

本書は、作曲家であり指揮者でもあったフェーリクス・メンデルスゾーン（一八〇九—一四七）によるバッハ復活について詳しく論じるだけでなく、その影響のもとに生み出された彼自身の宗教曲、特に《パウロ》と《エリヤ》というふたつのオラトリオについて深掘りしてくれている。

私自身、バッハの音楽、特にカンタータや受難曲の研究衆に合わせた改訂も余儀なくされた。そのあたりの事情を知るだけでも興味は尽きない。

メンデルスゾーンはまた《マタイ受難曲》のみならず、《ミサ曲短調》BWV二三二の上演をめざして苦勞している。実際に上演してみるとわかるのだが、こちらは《マタイ》よりも技術的にはるかに難しく、指揮者メンデルスゾーンの苦勞も大きかった。

こうしたさまざまな苦勞が、作曲家メンデルスゾーンの成長を助けた。彼自身の宗教作品であるオラトリオ《パウロ》（一八三六年初演）と《エリヤ》（一八四六年初演）こそはその成果ともいえる。それぞれ新約聖書と旧約聖書に題材を取った二曲のために、メンデルスゾーンはみずから台本も書いている。音楽的には《マタイ》の影響が大きい

に携わってきたので、メンデルスゾーンの作曲の師カール・フリードリヒ・ツェルター（一七五八—一八三三）が主宰するベルリン・ジングアカデミーの活動や、メンデルスゾーン指揮による《マタイ受難曲》の復活上演については調べもし、書いてもきた。しかし、メンデルスゾーンの専門家である星野氏は、後年、ゲヴァントハウス管弦楽団の指揮者となったメンデルスゾーンによる一八四一年ライプツィヒでの上演についても詳しく調べている。

現代とは異なり、当時はまだ《マタイ受難曲》のみならずバッハのほとんどの宗教曲は未出版だったので、メンデルスゾーンはベルリンでもライプツィヒでも、まず指揮用の総譜と龐大なパート譜を描える必要があった。楽器も、特に管楽器はバッハの時代とは大きく異なっていた。だから指揮者メンデルスゾーンは、一九世紀当時の演奏家と聴

《パウロ》に対して、《エリヤ》はより独創的だ。それぞれの詳しい楽曲解説には、メンデルスゾーン研究者としての著者の情熱が溢れている。

補章として挿入されたシュテーター論文の翻訳からは、メンデルスゾーンが台本作成にあたって当時の神学者クルムマツハーの説教集の影響を受けていたという興味深い事実が浮き彫りとなった。

終章「神とは何か、真理とは何か」において著者は、ユダヤ人の名家の出でありながら七歳でルター派プロテスタントの洗礼を受けたメンデルスゾーンのエキクメニカルな宗教観を、「心の声に聞き従えば、すべてを見いだすだろう」という父アブラハムの言葉を借りて提示している。

（ひぐち・りゅういち＝明治学院大学名誉教授、バッハ研究者、指揮者）

神学ダイジェスト132号

急速な変化を遂げる現代社会。その中において、多様な価値観に直面するキリスト者。本誌は海外の神学動向を紹介しながら、現代人のかかえる信仰への真摯な問いに光をあてる。

2022年6月発行
A5版112頁
定価640円（税込）

特集 恩恵論

巻頭言「恩恵論」に寄せて

ルターと「恩恵のみ」

恩恵と経験―ロナガンの視点―

恩恵と「純粹自然」―ド・リュバックの見方―

抑鬱状態における恩恵の可能性

旧約聖書における「食べること」の役割

モーセ五書の構成と内容―五つの五分の一―

●連載 私は思ったより大丈夫

石居基夫

P・オキヤラハン

L・Mベッティロ

D・ケルメット

J・コブレンツ

A・バリアリーニ

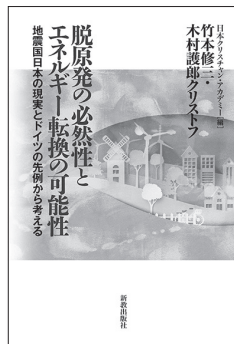
C・ドーマン

ホン・ソンナム

上智大学神学会
神学ダイジェスト編集委員会
東京都練馬区上石神井4-32-11
〒177-0044 Tel & Fax (03) 3594-4349
E-mail shing-dt@netjoy.ne.jp

勉強会のテキストに 最適の良書

〈評者〉久保文彦



**脱原発の必然性と
エネルギー転換の可能性**
地震国日本の現実とドイツの
先例から考える
竹本修三、木村護郎、クリストフ著
日本クリスチャンアカデミー編



本書は日本クリスチャン・アカデミーが企画した脱原発フォーラム（二〇一九年一月）の報告書である。講師二名（竹本修三氏、木村護郎クリストフ氏）の講演に加え、参加者による話題提供、質疑応答を収録する。

竹本氏（京都大学名誉教授、一九四二年生）は脱原発の市民運動で活躍する地球物理学者。講演「日本の原発と地震・津波・火山」は、原発の利用が自然の摂理に逆らった人間の愚かな行為であることを指摘する。今日の地球科学の知見によると、四つのプレートの結合部に位置する日本列島は、巨大地震が多発し大津波や火山噴火が繰り返される土地である。特に陸と海のプレートが衝突する太平洋沖では、二〇一一年時のような海溝型超巨大地震の発生が予測されている。人間は自然界の一員である限り、その営み全体は自然の摂理には逆らえない。この真実を踏み外し、

巨大地震が必ず発生する土地で原発を稼働させ、無毒化まで十万年レベルの監視が必要な放射性廃棄物を地中に埋め捨てできると考えるなら、それは自らの限りある能力を過大評価する人間の浅知恵に過ぎない。

竹本氏の講演録を拝読し、評者は「主を畏れることは知恵の初め」という聖句（箴一・七）を思い起した。原発事故を繰り返した人類に求められているのは、創造主が定めた自然の摂理と調和する科学技術の運用ではないだろうか。事故の教訓を学ばず今後も原発を利用し続けることは、主を畏れず知恵を欠く人間の振る舞いを意味していいよう。

木村氏（上智大学教授、一九七四年生）は、社会形成の基盤としての言語・エネルギーを研究する言語社会学者。講演「ドイツのエネルギー転換の思想と実践」は、脱原発を決断したドイツのエネルギー政策に日本人が抱く疑問に

答えつつ、その背景にある歴史と思想を紹介する。ドイツの脱原発政策は日本でも注目度が高く、多くの紹介記事が書かれてきた。本講演のポイントは、教会と原発問題の関係についての解説である。実は福島原発事故以前からドイツの教会はカトリックもプロテスタントも原発のリスクを長年にわたり論議し、エネルギー転換の必要性を市民社会に提言してきた。

福島原発事後、ドイツ政府の倫理委員会が原発の利用は持続可能性と責任の原則に反すると指摘した報告書を公開し、脱原発政策の推進役を務めたことは広く知られている。倫理委員会のメンバーには教会関係者が招かれている。エネルギー利用の倫理に関する議論の蓄積が教会にあった

ので、その見識が求められたのである。科学技術の暴走を防ぐために、そのリスク判断を専門家まかせにせず、市民の集合知によって行う「科学技術のシビリアンコントロール」の一翼を、ドイツでは教会が担ったと木村氏は指摘する。こうしたドイツの教会の姿は、日本の教会や宗教者の社会的責任を考える上で示唆に富む。

原発とエネルギーの問題は、科学技術文明とキリスト教信仰の関係や、自然環境破壊に対する教会の責任を考察する上で無視できないテーマである。教会・修道会・学校での勉強会のテキストに本書を推薦したい。

ノーマン・クラウス 南野浩則訳 働きかけるイエスの福音 問われる 宣教の変革



西洋キリスト教がもたらした強い確信に基づく絶対的真理としての福音宣教が、西洋文化の近代化プロジェクトにいかに取り込まれてしまったかを徹底して暴く、衝撃の自己批判の書。私たちの福音理解と宣教のあり方そのものを、その根本から問い直す預言者の希望の名著。
四六判・216頁・1760円

ジョン・ポール・レドラック著 敵対から共生へ 平和づくりの実践ガイド

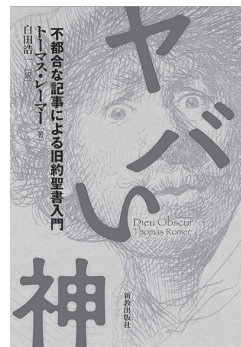


第36回庭野平和賞受賞！
敵意と対立の痛みから、新たな関係へと創造的に変革されていく、驚きの道案内。
新書判・152頁・1210円

ヨベル YOBEL Inc. info@yobel.co.jp
〒113-0033 東京都文京区本郷 4-1-1-5F
TEL03(3818)4851 FAX03(3818)4858
出版の手引き / 呈 (税込)

ほぼばい神の聖書への熱情と学問的精緻さ

〈評者〉左近 豊



ヤバい神
不都合な記事による
旧約聖書入門
トーマス・レーマー著
白田浩一訳



著者のレーマーは、スイスの大学で教鞭をとった後、コレージュ・ド・フランスの教授、現在は学長も務める当代表としての聖書学者の一人である。『申命記史書』や『100語でわかる旧約聖書』などが邦訳されており、数回来日もしている。二十歳代後半にフランスの改革派教会の牧師の訓練を受けた経験もあってか、聖書を読み始めた人たちが、聖書の叙述に違和感や躓き、時に嫌悪感さえ覚える人たちの問いに牧会的に真摯に向き合いながら、あえて物議をかもし聖書箇所を取り上げて、真正面からそれらと格闘しながら、ほぼばい神の聖書への熱情と学問的精緻さをもって本書は著されている。

旧約聖書の神については、排他的で残忍で好戦的で復讐心に燃えて敵対するものは殲滅することも厭わない非情な「裁きの神」、とても近代以降の人権感覚とは相いれないも

の先達たちの神との出会い、葛藤と格闘の道りが、知的興奮を伴って生き生きと読み手に迫ってくる。

以下第六章にわたって「神は男性か」、「神は残忍か」、「神は好戦的な暴君か」、「独善的な神の前に人間は罪人に過ぎないのか」、「神は暴力と復讐の神なのか」、「神は理解可能か」、そして「旧約の神と新約の神」を結論に配して閉じられる。どの章も、旧約聖書を紐解く者が必ずと言ってよいほどに引く掛かりを覚える聖書箇所が取り上げられる。キリスト教に関心を持ち始めた人には今はまだ読んでほしくないと思ったり、旧約を読み進んだ人から指摘されることの多い不快感や嫌悪感をもよおす「不都合な」聖書箇所について、本書は、護教的に神を擁護して問いを封じるのではなく、むしろそのような「ヤバい」箇所そのものの語

のというイメージが付きまとう。本書は、そのような旧約聖書の神観について、聖書記述の背後にある歴史的状况や文化的環境を丁寧かつ分かりやすく解説しながら、読み手自らが今一度、旧約の神観について再考し、旧約聖書を新鮮な思いで読み直す手がかりを提供する。また副題にあるように、旧約聖書の入門的知識も身につく贅沢な書である。白田氏の訳文は翻訳であることを忘れさせるほどに滑らかである。

全体で第六章からなっている。序論「人間に挑みかかる旧約聖書の神」は旧約の神の歴史の変遷（系譜）を辿る。そもそも古代イスラエルにとって一神教は本来の信仰ではなく、むしろ幾世紀にもわたって発展してきた概念であることが、旧約聖書の背景にある古代近東の政治・宗教・思想の歴史を通して明らかにされる。旧約の時代を生きた信仰りに忠実に聞きながら、湧き上がる問いを回避せずに、聖書が証しする、生きて働かれる神ご自身と向き合うことへと手引きする。

例えば神の残忍さについて論じる本書の二章で著者は、「聖書の神が持っている理解不能な側面を否定しようとする誘惑に負けてはならない。私たちがここまで扱ってきた（神の残酷さを語る）テキストはそのことをはっきりと語っている」と述べて、真正面から聖書テキストと四つに組むことを促し助ける。そして、神の残忍さに直面したヨブを例に、神に逆らっても叫び、大胆さをもって対峙し、転じて自らの判断基準さえ問われるような、異質な存在である神との出会い、そしてその関係のダイナミックさに気づかせるのである。

(四六判・二五〇頁・定価二四二〇円・新教出版社)

ヨベルの月刊・既刊案内

大貫隆著 **ブルトマン学派とガタマーを読む** 反響

ヨハネ福音書解釈の根本問題

復活前と現在の「地平」が「融合」するヨハネ福音書の重要構造を解明！ブルトマン、ケーゼマン、ボルンカムら錚々たる聖書学の権威による解釈でも見落とされなかった、イエスの全時性と共同体に吹き渡っていた聖霊の息吹への気づき。この視座から捉え直して見えてくる新たな「地平」の融合とは。四六判上製・二四〇頁・一九八〇円

青野太潮 **福音の中心を求めて** 3版

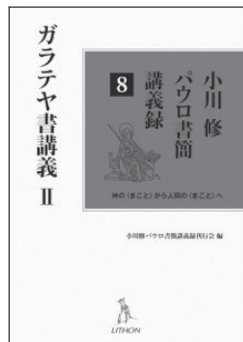
どう読むか、新約聖書

聖書学の常識は、信仰のヒジョウシキ。この逆説と乖離の荒海を、いざ航海。しかしそれらふたつ（聖書学と信仰）の「常識」は、多くの場合、厳しく相対立していますので、ことはやっかいです。新書判・240頁・2210円

ヨベル YOBEL Inc. info@yobel.co.jp
〒113-0033 東京都文京区本郷4-1-1-5F
TEL.03(3818)4851 FAX.03(3818)4858
出版の手引き / 呈 (税込)

聖書を共に、
神学的に読む喜び

〈評者〉石川 立



小川修
パウロ書簡講義録 8
ガラテヤ書講義 II
小川 修著
小川修パウロ書簡講義録刊行会編



『小川修パウロ書簡講義録』全巻の刊行が完結した。本書『小川修パウロ書簡講義録 8 ガラテヤ書講義 II』は、『同 7 ガラテヤ書講義 I』の続巻であるが、『講義録』全10巻の完結を祝う記念すべき巻でもある。二〇一一年に始まった『講義録』刊行から十一年の歳月を数えたことになる。

本書に収録された講義は、二〇〇七年度に同志社大学院神学研究科の授業として神学館二階演習室2で行われたものである。これに二〇一〇年四月に日本福音ルーテル東京池袋教会で行われた講演が続き、七名の「編集者の声」によってこの最終刊行の巻は締めくくられている。

当『講義録』は、パウロ書簡の解説や説明ではない。パウロ書簡を読もうが読まないが、例外なくすべての人間を根源的に生かし支える事柄（独語で「ザツヘ」）そのもの

の仕方ではなく、『講義録』の読者は、教室の中で、神の〈まこと〉の福音の響きに身を任せ、聖書を神学的に読む喜びを学生たちと共に経験することができるのである。

同志社の講義では、少々よそ行きの言葉遣いをされたのかもしれないが、東京の教会での講演「パウロは何を説いたのか」では、より打ち解けた雰囲気、小川先生（私たちの学校の教壇に立たれたので「先生」と呼ばせていただく）のべらんめえ調が炸裂し小気味がいい。そこには全10巻で縷々語られたことが端的に陳べられている。人間は〈からだ〉であり、その〈からだ〉の本当の主人公はキリストの〈まこと〉。生死はすべてキリストという〈まこと〉の中にあり、これが復活である。キリストという〈まこと〉があくまで私たちの〈主〉である。

を、パウロを通して明らかにしようとする書である。キリストの〈まこと〉（ふつう「信仰」と訳されるギリシヤ語ピステイスの当『講義録』での訳）がこのザツヘに当たる。本書の講義が扱うガラテヤ書の後半、四、五、六章には、二章の言葉「生きているのは、もうわたしではない。キリストがわたしのうちに生きている」（「人基一体」と呼ばれる）が引き続き鳴り響いている。いや、より正確に言えば、この『講義録』全巻において、私たちすべての内なるキリストという〈まこと〉の福音の喜びが、パウロ書簡の一字一句を通して私たちに響いて来ているのである。

『講義録』にはコツコツと黒板を叩く音や咳払い等も洩れなく記録されている。そこに醸し出される臨場感の中で、読者もその場に、聴講している学生たちと共に居合わせる事ができる。机上で一人要旨だけを掴みとるような理解

「編集者の声」では、小川先生の「投げかけ」が明確にされ真摯に受けとめられる。先生にどう応えるのかはまた、『講義録』の読者すべてにとっても課題になる。刊行会や編集者の方々に敬意を表したい。『講義録』の発行を企画し、講義・講演中のわずかな音も聞き逃さずに記録し編集することは、少なからぬ犠牲を強いただろう。最後に、小川先生を同志社神学部にお呼びした者として一言。個人的な事情で授業を代わりに担当していただいたのだが、それを機に、全10巻の『講義録』という果実が誕生した。このことに評者は誰よりも驚きを覚えている。そして、喜び感謝している。

（いしかわ・りつ 同志社大学神学部教授）
（A5判・二九七頁・定価三三〇〇円・リットン）



新刊
聖書学論集53

日本聖書学研究所編
●A5判並製 160頁
定価3,300円(税込)

旧約は禍いについて
いかに語ったか
—神の義と人間の成熟
などにも触れながら—
竹内 裕

ヨハネ黙示録における
わざわい(πληγη)
—十のわざわい(出エジプト)
の再話の伝統を背景に—
遠藤勝信

ホセア書4章16節の
翻訳と解釈
—拒絶と罰の狭間に
救いは見えるのか—
長井隆児

「永遠の天幕」(ルカ16:9)
のアイロニー
—ルカ福音書における悪の人物
造形をめぐる一考察—
河野克也

放浪のラディカリスト・
パウロと無償の福音宣教
大川大地

LITHON [リットン]

〒101-0061 千代田区神田三崎町2-9-5-402
☎03-3238-7678 FAX03-3238-7638

神学する者が立つべき 原点が示される

〈評者〉 小室尚子



シンガクすること、
生きること
いちばんわかりやすい
キリスト教神学入門
ケリー・M・カピック著
藤野雄大訳



神学校に入って最初の講義で、教授から「神学する喜び」という言葉を聞いたときの戸惑いのような、一方で新鮮な感覚を、今も鮮明に思い出す。そのような言い回しをそれまで聞いたことがなかったからである。「神学する」とは一般に言わないのではないだろうか。しかし神学校の学びは、確かに「神学する」喜びを教えてくれた。他の学問に向き合うことは全く違う感覚であったが、その感覚をどのように説明できるのか、これまで言葉にならなかったのである。が、本書は、それを明確に、また「神学する」目的までも鮮明に語りつくしている。

原著者は、アメリカ合衆国ジョージア州のカペナント・カレッジの神学教授ケリー・M・カピック氏で、「訳者あとがき」によれば、広義のカルヴァン主義の流れをくむ、長老派的、改革派的な伝統を重んじる新進気鋭の神学者と

な冒険です。両者の間に冷徹な科学的分離が入り込む余地はありません」という言葉で始められるように、神学は、言うまでもなく信仰が前提になるが、神学する者自身の、神の前における生き方、思考あらゆる姿勢が問われる学問であるということである。

ゆえに、祈り、学び、悔い改め、聖書の読み方等々、人生のすべての面が問われていることを常に覚えていることである。知識だけで神学は語れないのである。

英語のタイトルは「A Little Book For New Theologians」、日本語でタイトルは、「シンガクすること、生きること——いちばんわかりやすいキリスト教神学入門——」となっているが、これは、入門書というより、「神学する」

のことである。

内容構成は、二部構成になっており、第一部は、「なぜ神学を学ぶのか」、第二部は、「信仰的神学と神学者の特徴」となっている。

第一部に、「神学とは、専門家のためのものではありません。神学とは、生き、呼吸し、苦闘し、恐れ、そして希望を抱き、祈る、すべての人が行う思索であり、対話なのです」と言われるように、神学することは、我々の生活の外で起こるのではなく、生活と切り離せないものである。しかし、神学していることが偶像になっているということが起こっていないか、神学する者が陥りやすい誘惑、誤りを的確に指摘しながら、「神学とは」そして「真に神学する」とはどういうことであるのかを説いていく。

第二部、第4章が「神学的思索とは、人格に関わる深遠つまり研究者のみならず、聖書を説くすべての人々に、自己吟味を迫る一冊である。初めて神学する者だけでなく、すべての神学する人々に一読を薦めたい。ここには神学するものが立つべき原点が示されているからである。

著者は、結びの中で、「これまで書き記してきたことは、わたし自身が、すでに成し遂げたものではなく、自分なりに、正しい方向性をさし示しているという点で、健全な神学者と神学のしるしであると考えたものである」と述べている。

(こむろ・なおこ) 金城学院大学教授
(A5判・一二〇頁・定価一三三〇円・一麦出版社)

これでわかる！
アメリカのキリスト教！

アメリカ・キリスト教入門

関西学院大学法学部教員

〔著〕 大宮有博
Tomihiro Omiya

アメリカの政策を知る上で切り離すことができない、アメリカ・キリスト教。その歴史を、「ピューリタンたちによるイギリス人植民地の誕生」から「バイデン大統領の時代」まで、専門用語をなるべく避け、初学者にもわかりやすく解説。アメリカ文化のみならず、日本各地の教会やキリスト教主義学校、病院の背景、さらには、世界情勢を知る鍵にもなる一冊。



目次

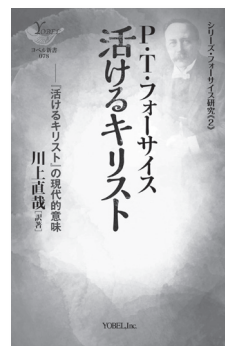
第1章	イギリス人植民地の誕生とピューリタン
第2章	大覚醒とアメリカ独立
第3章	リバイバルと南北戦争
第4章	アフリカンアメリカンの教会
第5章	移民の宗教
第6章	世界に広がるアメリカのキリスト教
第7章	産業発展期のキリスト教
第8章	プロテスタントにおける新しい潮流
第9章	二つの世界大戦から冷戦
第10章	変革の時
第11章	政治化したファンダメンタリスト
第12章	9.11からバイデンの時代へ

A5判・300頁・定価2,860円(税込)

キリスト新聞社 since 1946
169-0051 東京都新宿区西早稲田2-3-18
AVACOビル6階 TEL 03-5579-2432

不器用な人びと

〈評者〉大頭真一



P・T・フォーサイス
活けるキリスト
『活けるキリスト』の現代的意味
川上直哉 著



フォーサイスを読もうと何度となくこころみたほくである。今さらもう一冊の訳書が出たからと言って、手に取るつもりはなかった。

けれどもあの川上直哉から、書評を書くように指名があったとなると話は別だ。こころはずませて、というわけではないのだが、手に取ることになった。

かつて平野克己さんが、大頭真一と焚き火を囲む仲間たちの「焚き火を囲んで聴く神の物語・対話篇」を、「奇書」と呼んだことがある。だとしたら、この書もまちがいがなく奇書と言える。なにせフォーサイス「活けるキリスト」の訳本なのに、187頁のうち活けるキリストは47頁だけ。その他の部分はおおむね、なぜフォーサイスが読みにくいのか、を論じているのだから。収録されている論文のひとつは、なんと、『フォーサイスの「わかりにくさ」と題し

ているのだ！ こんなの売り方をするのは、まちがいないく不器用な人間である。そして川上直哉は多くの知るかぎり、世界でもっとも不器用な人間のひとりである。

今までもずいぶん不器用に生きてきたようだし、今もまた石巻で、いまだ癒えぬ大震災の傷跡を不器用につくろっているのだ。そんな人間が不器用なフォーサイスに惹かれたのもむしろ自然なのだろう。今から100年ほど前に生きたこの人は「私はずいぶん前から『わかりにくい人』と言われている。」(60頁)と、自ら記す。確信犯である。その確信は、どうやら、神はわかりにくく、世界の窮状もまたわかりにくいというところから、来ているようだ。つまり、教会が語ることは、わかりやすくなりすぎてはならないのだ。そのとき、教会はこの世の窮状とそこに働く神の力を目を閉じ、耳を塞いで、内なる分かりやすさのなか

にしゃがみ込むことになるのだ。

川上直哉の不器用さ、そして、フォーサイスの分かりにくさの原因は神学へのこだわりにある。フォーサイスは言う。「神学とは、端的に世紀単位で思索することである。宗教は現在についてのみ語る。しかし、神学は宗教と人類の未来について語るのだ。」だから、コロナの時代に神学は必要なのだ。被災地に神学は必要なのだ。現代の問題が何であり、そこでなすべきことは何であるかを知りたいならば、あなたは本書の173頁を読まなければならない。

川上直哉の不器用が頂点に達するのは、164頁のあたりである。そこで川上は、無鉄砲にも、今をときめくキリスト教界の論客に苦言を呈するのだ。こんなことはほくなら決してしない。今からでも削除したほうがいいと思うが、

これまた不器用なヨベルの安田社長も、そんなことはしないのだろう。

フォーサイス、川上直哉、安田正人、こうした不器用な人びとが作った奇妙な書。けれども気がつく、ぼくはこの本を読んだのだ。だとするならば、川上直哉はとても器用なことをしたことになる。この人は、一周回って不器用ではないのかもしれない。ふと、そう思ったが、やはり気のせいだろう。川上直哉は多くの知るかぎり、世界でもっとも不器用な人間のひとりである。

(おおず・しんいち 京都信愛教会/明野キリスト教会牧師、関西聖書神学校講師)

(新書判・一九二頁・定価二二〇円・ヨベル)



心の垣根を越えて

テゼのブラザー・ロジェ
—その生涯とビジョン—

打樋啓史・村瀬義史監訳



なぜ、世界中の若者が惹きつけられるのか。

「テゼ」という驚くべき出来事を可能にした人物ブラザー・ロジェの伝記。人々から最も愛されたキリスト教の指導者の一人。

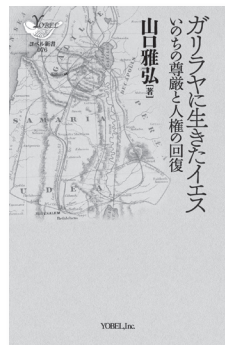
A5判
定価 3,080 円 [本体 2,800 円 + 税] 円
ISBN978-4-86325-130-4



株式会社 一麦出版社
札幌市南区北ノ沢3丁目4-10
TEL (011) 578-5888
<https://www.ichibaku.co.jp>
携帯 mobile.ichibaku.co.jp

現代の新しいキリスト教 解体新書

〈評者〉 清水和恵



ガラリヤに生きたイエス
いのちの尊厳と人権の回復
山口雅弘著



半世紀前の話に遡る。著者が北海道で牧師をされていた時、学生たちに語った言葉が忘れられない。「聖書に書いてあることは本当にあつたと思うかい？ 聖書はね、神話や物語が書かれてあるんだよ……。」その時、大変な驚きと衝撃を受けた。当時、そのようなことを言う牧師はいなかった。いえ、ただ単に出会えてなかっただけかもしれないが、「聖書に書いてあることは、みんな正しくて、そのとおりにあつた事と素直に読まなければならぬ。」といった類はよく耳にした。

だが著者は、聖書に対して「なぜ、どうして？」の問いや自分自身の考えを大事にしつつ、聖書を歴史的に批判的に（否定的ではなく）想像力をもって読むことの豊かさ示してくださいました。その聖書への向き合い方や読み解きは、本書においても随所に発揮されていると思う。

ような地であつたか、その歴史的、政治的、経済的、宗教的、文化的な背景に着目し聖書学のみならず、考古学、歴史学、社会学、文化人類学などの諸研究を援用してガラリヤに生きたイエスや人々と、その時代状況を探求している。つまり「ガラリヤを知ること、イエスとキリスト教がわかる」を丁寧に示しつつ「いのちの尊厳と人権の回復」を重層的に論じている。さらに北イスラエルの宗教伝統を語り継ぎ、権力者の暴力的支配に対して、抵抗の魂を持ち続けたガラリヤの人々や、父権制社会にあつて女性たちや力なくされた人たちが、イエスと共に抑圧に屈せず、喜びと希望を共有しようとしていた姿を描写しているところに筆者は魅かれる。

本書は現代の新しい「キリスト教解体新書」として書かれた。その執筆動機を著者は『旧態依然とした神学と権威・権力を保持した現在の「正統的キリスト教」を「解体し」歴史に生きた「イエスの生き方の核心」に立ち戻って「キリスト教の在り方」を問い直したい』（三二八頁）と述べているが、イエスに対する新しい視野を広げるだけでなく、これからの教会とキリスト教の在り方について問いを發していることに注目したい。

また、この「キリスト教解体新書」は手軽に持ち運べて、

本書はガラリヤにおけるイエスの生き方の核心に迫ることを念頭に、主な関心事を3点あげている。その**第一は**、1世紀にパレスチナのガラリヤで生きたイエスの「歴史的事実」を探求し、なぜローマ帝国の極刑である「晒し柱」(十字架)の死に至つたか。**第二は**、イエスの処刑後、どのような変遷を経て「迫害されていたキリスト教」が、4世紀末にローマ帝国の「国教」として成立したか。さらになぜ「迫害」する宗教に変質したのか。**第三は**、一人ひとりの固有な「いのちの尊厳と人権」を回復することを明示し、わたしたちがイエスの「生き方の核心」を受け止めて生きることの不可欠さとキリスト教の「新生」の道をどう示すかである。

著者はイエスを知る上で、ガラリヤに焦点をあてて論述している。イエスが生まれ育ち活動したガラリヤとはどのどこでも読むことができる「新書」となって登場した。テーマ・内容は重厚で骨太であるが読みやすい。さまざまな人が手に取り、豊かな対話の糸口となることを願う。

本書はガラリヤに生きたイエスとその時代の人々と、わたしたちのこれからに出会う旅へいざなう新しくワクワクするガイドブックである。

(しみず・かずえ 日本基督教団新発寒教会牧師)
(新書判・三三六頁・定価一六五〇円・ヨベル)

村椿嘉信著 *絶賛発売中*

荒れ地に咲く花

生きることと愛すること

混沌とした時代にあつて、社会のさまざまな問題と関わりながら、どのように生きるべきなのか。イエスは「愛すること」が決定的に重要だと指摘した。

四六判・160頁
定価 1,320円
ISBN978-4-909871-43-5

ヨベル YOBEL Inc.
お問い合わせ: info@yobel.co.jp
情報: <http://www.yobel.co.jp>

■教文館

精選 死海文書

村岡崇光編訳

紀元前後のユダヤ教また新約聖書の背景を知る上で不可欠な死海文書。その中から最も重要な「創世記外典」「ハバクク書注解書」「共同体の規約」を精選して翻訳。ヘブライ語、アラム語の世界的権威による画期的な書！

四六判・126頁・定価3080円

■新教出版社

初期キリスト教の世界 [仮題]

松本宣郎著

ローマ帝国史の視点から初期キリスト教史研究の地平を精力的に拡大してきた著者の、研究史的回顧を含む11の論考・講演を収録。地中海世界に生きた人々の心性、職業労働観、教会の営みなどをめぐり、多岐にわたる論点が浮かび上がってきて興味尽きない。

四六判・400頁・予価3500円

INFORMATION

近刊情報

■日本キリスト教団出版局

真理の霊が来るとき

——復活者キリストを証言する新約聖書

市川喜一著

新約聖書を緻密かつ霊的に読み解き、読者を「復活者キリスト」と「聖霊」の現実に出会わせる一冊。宮本久雄氏（東京大学名誉教授）推薦。

四六判・152頁・定価1760円

最も偉大な祈り

——主の祈りを再発見する

J・D・クロツサン著、小磯英津子訳、河野克也解説
史的イエス研究で一時代を画した著者が、学問的な知見とともに深い霊性をもって主の祈りを解き明かす。

A5判・256頁・定価4180円

書店名	郵便番号	住所	電話	ファックス	URL	メール	郵便振替
北海道キリスト教書店	060-0807	札幌市北区北七条西6丁目	011-737-1721	011-747-5979	http://www.jp-shop.com	sasaki@jp-shop.com	02770-2-56520
善隣館書店	020-0025	盛岡市大沢川原3-2-37	019-654-1216	共用		zeninkan_systen_0530@ghoo.co.jp	02350-0-874
仙台キリスト教書店	980-0012	仙台青葉区1-36 靴櫃センター・エルフ	022-223-2736	共用		fcwvk524@ybb.ne.jp	02230-0-31152
恵泉書房	260-0021	千葉市中区新館2-2 千葉カリスチャペルビル	043-238-1224	043-247-3072	http://www.keisen.christian.jp	keisen@vestia.ocn.ne.jp	00120-9-43619
教文館	104-0061	東京都中央区銀座4-5-1	03-3561-8448	03-3563-1288	http://www.avaco.info	xbooks@kyobunkwan.co.jp	00120-2-11357
アバコ・ブックセンター	169-0051	東京都新宿区西早稲田2-3-18	03-3203-4121	03-3203-4186	http://www.avaco.info	avaco@avaco.info	00130-0-96398
待農堂	167-0053	東京都杉並区西荻南3-16-1	03-3333-5778	共用	http://taishindo-books.jimdo.com/	taishindo@jcom.home.ne.jp	00110-8-95827
バイブルハウス青山	104-0061	東京都中央区銀座4-5-1	03-3567-1995	03-3567-4435	http://biblehouse.jp	biblehouse@bible.or.jp	00160-2-18410
東京キリスト教書店	162-0814	東京都港区新川1-9-1 日キ協内(外販専門)	03-3280-5663	03-3260-5637		tokyo@nikkikan.co.jp	00130-3-60976
横浜キリスト教書店	231-0063	横浜市中区花咲町3-96	045-241-3820	045-241-5881	http://www.biglobe.ne.jp/~yokohamats/mb.html	sksch@mvva.biglobe.ne.jp	00250-4-2512
清光書店	951-8114	新潟市営所通一番町313	025-229-0656	共用			00560-8-51419
静岡聖文舎	420-0866	静岡市葵区西草深町20-26	054-260-6644	054-260-5612	http://www.s-seibun.co.jp/	info@s-seibun.co.jp	00810-8-26558
名古屋聖文舎	464-0850	名古屋市千種区今池5-28-4	052-741-2416	052-733-2648	http://nagoya-seibunsha.la.cocacn.jp/	nagoya-seibunsha@nifty.com	00810-5-14073
京都ヨルダン社	602-0854	京都市上京区荒神口通河原町東入ル	075-211-6675	075-211-2834	http://web.kyoto-net.or.jp/people/ktjordan/	ktjordan@mtbx.kyoto-net.or.jp	01010-2-594
大阪キリスト教書店	530-0013	大阪市北区茶屋町2-30	06-6377-6026	06-6377-6027	http://osekabooks.web.fc2.com/	ochrbook@river.ocn.ne.jp	00990-3-43009
バイブルハウスびぶるの森	591-8041	堺市北区東雲東町1-1-16	072-257-0909	072-253-6132		sakai_jbs@bible.or.jp	00160-2-18410
神戸キリスト教書店	650-0021	神戸市中央区三宮町3-9-18三彌ビル2F	078-331-7569	078-945-9388		kobex@nikkikan.co.jp	00170-2-421390
広島聖文舎	730-0841	広島市中区舟入町12-7	082-208-0022	082-208-0177		hseibun0951@yahoo.co.jp	01360-4-1958
リバーサイドブックス	779-1105	徳島県阿南市羽ノ浦町古庄大道ノ西13	090-8694-4986	050-3142-3017		ykwbt3@gmail.com	16220-17974891
松山キリスト教書店	790-0804	松山市中一丁目1-23	089-921-5519	089-921-5413	http://www.geocities.jp/natsuyara_1007/index.html	sksch@ddokidoki.ne.jp	01650-1-2120
北九州キリスト教ブックセンター	802-0022	北九州小倉北区上富野5-2-18	093-967-0321	共用		kebookcenter@bible.or.jp	01780-4-39965
新生館	810-0073	福岡市中央区舞鶴2-7-7	092-712-6123	092-781-5484	http://www.sinseikan.jp/	info@sinseikan.jp	01750-5-10932
キリスト教書店ハレルヤ	862-0971	熊本市大江4-20-23	096-372-3503	共用		k-haleruya@bible.or.jp	00160-2-18410
沖縄キリスト教書店	904-2143	沖縄県沖縄市知花4丁目12-33	098-927-0220	098-938-1102	https://www.okinawacbs.net	info@okinawacbs.net	01790-4-152916

※一般書店関係の方は 日キ販営業部 TEL 03-3260-5670 にご連絡ください。

福音と世界

2022年7月号

特集 空になることの革命

寄稿者 白石嘉治、宮本久雄、池上俊一
後藤里菜、佐藤紀子、五井健太郎

新連載 フッド・スピリチュアルズ インナー
シティの霊性(山下壮起) / 好評連載 サンダー
ス&ヤーバー「教会におけるマイクログレ
ーション」(訳・解説 眞下弥生)、福音のフラグ
メント(有住航)、「日本のキリスト教」を読む(山
口陽)、ルカ福音書(山崎ランサム和彦)ほか

A5判・定価660円・〒70円
定期購読についてはお気軽にご相談下さい。

新教出版社 TEL: 03-3260-6148
Email: sales@shinkyō-pb.com

から室集編

色の光に会える。

あるいは空中で光の尾を引き、あるいは草陰で点滅して、誰かに自分の存在を知らせようとしている。それにしても仲間を見つげるための懸命な信号なのに、音もなく何と静かなのだろうか。

イエス様がキリスト者たちの存在を、生活の中の小さな光——灯——に譬えられたことを思い出す。マタイ、マルコ、ルカの福音書はよく似た言葉をそれぞれ違う文脈で残

七月の楽しみは、蛍を見ること。

東北の実家を出て少し歩くと、一面に広がる水田地帯の、ある限られた区画だけ、日が落ちきつてから数時間の間だけ、目が暗さに慣れるにしたがって、やわらかく明滅する黄緑

予告

本のひろば

2022年8月号

本・批評と紹介

(書評) 中山直子著『二羽の小鳥』、長谷川忠幸著『モーセの仰ぎ見るテムナーとは何か』、中島耕二編『タムソン書簡集』、斎藤宗次郎編著『内村鑑三先生の足跡』、窪寺俊之著『金子みすゞの苦悩とスピリチュアリティ』、富坂キリスト教センター編『北東アジア・市民社会・キリスト教からみた「平和」他

しているから、きつとイエス様ご自身がこの比喩を好んで、さまざまな折に語られたのだろうと想像する。

三つの福音書を読み比べていたら、面白いことに気づいた。マルコ福音書4章ではこの「灯」が、神の国の譬えに前後を囲まれて出てくる。どんな妨げにもかかわらず、種は三〇倍、六〇倍、一〇〇倍もの実を結び、植物は誰も知らぬ間に生い茂り、辺りを覆いつくす——灯は、世界中に及ぶこの「神の国」の勢いに巻き込まれて、そこにある。

灯に昼間の明るさはない。暗闇をほのかに照らし、光の届く範囲はごく限られ、人の手でかき消されることもある。それでも、この「灯」は力強い。神の国のものだから、力強い。変わりゆく自然の中で数は少なくとも、約束を守るように毎年現われる、蛍にも似ているだろうか。

(石澤)

真理の霊が来るとき

復活者キリストを証言する新約聖書

市川喜一 (独立伝道者)

2022年6月20日刊行予定

「十字架されたキリスト」が示す光に導かれた著者が、聖書を靈的に読み解き、ヨハネ福音書とパウロ書簡を中心に、「復活者キリスト」と「聖霊」の現実を解き明かす。

◆四六判 並製・152頁・定価1,760円

宮本久雄氏 (東京大学名誉教授) 推薦!



真理の霊が来るとき

復活者キリストを証言する新約聖書

市川喜一
Ichikawa Kiichi

日本キリスト教団出版局

三浦綾子 生誕100年

記念の新刊
好評既刊
発売中!



愛は忍ぶ 三浦綾子物語 挫折が拓いた人生

三浦綾子記念文学館 監修 日本キリスト教団出版局 編

挫折が続いた三浦綾子の人生を再話。彼女を支えた人たちの生き様と愛を描く、挫折と再生の物語。 ◆A5判変型 並製・80頁・定価1,320円



三浦綾子 祈りのことば

おちあいまちこ 写真

三浦綾子の祈りに写真家・おちあいまちこの作品を添えたコラボ作。祈りと写真とが響き合う。 ◆A5判変型 並製・80頁・定価1,320円



三浦綾子 366のことば

森下辰衛 監修 松下光雄 監修協力

『氷点』『塩狩峠』『銃口』など、三浦綾子の著作から366の珠玉のことばを厳選して収録。 ◆四六判 並製・160頁・定価1,650円

一九五七年七月一日 第三種郵便物認可
二〇二二年七月一日発行(毎月一回)一日発行
本のひろば 第七七五号 二〇二二年七月号

6月の新刊 (価格表示は税込)

夜明けを共に待ちながら

香港への祈り

香港と日本の祈りが一つになった!

朝岡 勝 / 松谷暉介 / 森島 豊 編



国家安全維持法下で揺れ動く香港のため、12人の牧師を中心に祈りの運動が立ち上がった。2020年10月31日から始まった「香港を覚えての祈禱会」。説教と祈りによる新しい教会的政治運動の姿がここに! 松谷暉介編訳「香港の民主化運動と信教の自由」の姉妹編。

「香港を覚えての祈禱会」呼びかけ人(五十音順)

- ①朝岡 勝(日本同盟基督教団)
- ②大石周平(日本キリスト教会)
- ③大嶋重徳(日本福音派教会)
- ④大西良嗣(日本キリスト改革派教会)
- ⑤伽賀 由(日本メソヂスト教会)
- ⑥唐澤健太(カトリック長老教会)
- ⑦平野克己(日本キリスト教団)
- ⑧星出卓也(日本長老教会)
- ⑨増田将平(日本キリスト教会)
- ⑩三輪地塩(日本キリスト教会)
- ⑪松谷暉介(日本キリスト教団)
- ⑫森島 豊(日本キリスト教団)

● A5判・並製・188頁・定価1,980円

好評発売中!

香港の民主化運動と信教の自由

松谷暉介 編訳



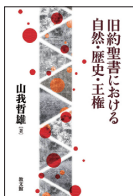
表現の自由を制限する「香港国家安全維持法」が施行された香港で、今後「信教の自由」はどうなるのか? 信仰の力によって戦う香港の宗教者たちの声を聴く。

● A5判・並製・192頁・定価1,980円

旧約聖書における 自然・歴史・王権

山我哲雄 著

聖書解釈学の最前線の手法と実践



日本屈指の旧約聖書学者による最新の論文集。自然と人間、食物規定、平和の観念、王権・王朝の神学的理解など、旧約聖書の思想と文化の根幹に関わる主題を扱う。俯瞰的視点からの概観と緻密なテキスト分析により、多様性と緊張関係を超えた旧約聖書全体を貫く観念を描き出す。

● 四六判・並製・220頁・定価2,530円

好評発売中!

旧約聖書の象徴世界

古代オリエントの美術と詩編

0・ケール 著 山我哲雄 訳

古代オリエントの図像から詩編の世界を例証する「目で見る詩編入門」。旧約時代の人々の思考様式を主題別に解き明かし、視覚的なアプローチで詩編の祈り手たちが思い浮かべるイメージの世界に近づく。図版約550点、写真約30点所収。

● B5判・上製・464頁・定価10,340円

発行所 〒162-8614 東京都新宿区新小川町九一 一般財団法人キリスト教文書センター
電話 03-3336-0165 / 03-3336-0170 / 03-3336-0171
振替 001-7015167
発行人 金子和人 編集人 白田浩一 印刷所 モリモト印刷
発売所 日本キリスト教書販売株式会社 電話 03-3336-1567

定価七八円(税抜七円) (千63円)
一年分二二〇円(送料共)

教文館

〒104-0061 東京都中央区銀座4-5-1
電話 03-3561-5549 (出版部直通) <呈・図書目録>

キリスト教の書籍やCD、グッズのご注文は(e-shop 教文館)
<http://shop-kyobunkwan.com/> まで!

